

今回は神々ではなく、番外編としてチベット仏教(中国語で西藏仏教)の歴史に実在した教祖の一人を描いた壁画をご紹介します。

女王谷では元来ヤクを放牧する標高 4000m 位のアムド系チベット族(中国語で安多藏族)が住む場所にチベット仏教ニンマ派(中国語で西藏仏教寧瑪派または紅教)のお寺が見られます^{註)}が、例外的に丹巴の町の近くの標高 2300m 位の山腹に在る中路集落に今回ご紹介するチベット仏教ニンマ派のお寺が有り、旧金堂に大規模な壁画が残っています。お寺の歴史は古く、現在の中路集落に住む人達の祖先が 1000 年位前に移民して来た時にチベット仏教ニンマ派を持ち込んだようです。移民して来た当時は羊を追う放牧の民だったと伝承されていますが、現在この標高ではギャロン・チベット族(中国語で嘉絨藏族)として畑作中心の農業を生業にしています。ギャロン・チベット族の一口では語れない複雑な移民の歴史の一端を表しています。

話を壁画に戻しますが、調査したフランスの研究者 Nils Martin 博士によると、ヒマラヤ北部等に残っている物と同じネパール派画(中国語で尼泊爾派画)と呼ばれる四角い顔立ちが特徴の 500 年位前に描かれた仏教壁画だそうです。私が壁画を見て気になったのは、異性の脇侍が数多く配されているだけでなく、ニンマ派教祖の公にされているだけでも 3 人いた妻達も菩薩のような脇侍として描かれている事で、ニンマ派の「墮落」が原因になって 16 世紀末にツォンカバ(中国語で宗喀巴)がチベット仏教ゲルク派(中国語で西藏仏教格魯派または黄教)を興したとされている事に成るほどと領きました。ただこれはニンマ派がタントラ仏教に影響されていたのに加え、古代ペルシャ B.C.10 世紀頃に起源を持つ拝火教の流れを組むボン教とも融合したため、後世価値観が変化して「墮落」した様に見られたとも解釈できます。

これら壁画の幾つかを以下にご紹介します。なお全体として保存状態が悪い壁画の中から比較的状态が良い部分を選んでいきますので、選択が偏っているように感じられるかも知れない点をご容赦下さい。

■注: 女王谷では近年、アムド系チベット族を標高の高い所から低い所へ移住させる政策のため、政府援助で移住地近くに新しいチベット仏教ニンマ派の綺麗なお寺が建てられています。



写真1: 教祖とされるパドマサンババ“Padmasambhava”(中国語で蓮華生)或いはグルリンポチェ“Guru Rinpoche”(左)と不詳な脇侍(中)と菩薩の脇侍として描かれた第一の妻“Yeshe Tsogyal”(右、中国語で益西措嘉)

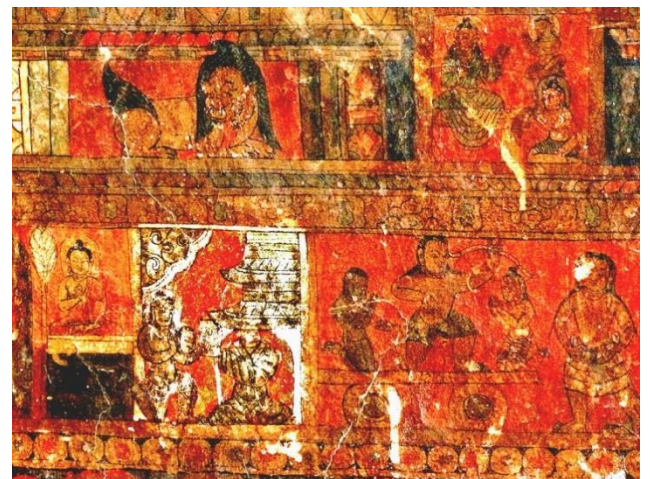


写真2: 信仰心に溢れた世人の暮らしを描いた部分画



写真3: 壁画が残る旧金堂の外観(新しい金堂は近くに建てられています)